Vol.65-No.01　　2013年4月

阿佐ヶ谷教会

信友会会報

1月総会、2月例会、3月役員会報告

「使徒言行録の学び」（第7回）　大村　栄 牧師
―新約聖書　使徒言行録　第7章―（2月24日開催）
1月信友会総会報告　（1月27日開催）
新旧合同役員会記録　（3月24日開催）

いよいよ新年度が始まりました。本年度も信友会は例会での学びと活動を通じて共に交わり、学ぶ部会でありたいと考えております。皆様の例会への積極的な参加をお願いいたします。

さて、本号は前回発行から時間が空いた事をお詫びするとともに、1月からの3ヶ月間の報告号とさせて頂きます。内容は2月例会で行われた 7 回目の「使徒言行録の学び」講演記録と 2012 年度の信友会会計報告、そして最終ページに1月の信友会総会、2月、3月の役員会記録を掲載しました。

本年度もわかりやすく楽しめる会報作りを目指します。ご意見やアイデア、投稿などもお待ちしております。

「聖霊行伝をたどる―使徒言行録の学び」　大村　栄 牧師

―新約聖書　使徒言行録　第7章、ステファノの説教―

今回は、使徒言行録7章のステファノの説教を中心に学びます。

第6章で、ステファノなど7人の教会奉仕者が選出されましたが、ステファノは奉仕者としてより伝道者としてディアスポラのユダヤ人を中心に宣教活動を行います。ステファノは恵みと力に満ち不思議な業としるしを示し、仕掛けられた議論でも彼らを言い負かしたので、人々は「モーセと神」を冒涜したとしてステファノを逮捕して最高法院に引き出します。第7章は、ステファノの説教との小見出しですが、モーセと神の冒涜の罪状について聖書の解き明かしを行い、ユダヤの歴史について克明に語りますが、この証言を聞いて人々は激しく怒ります。その理由を噛みしめながら学んでゆきましょう。

（次ページへ）

1月13日の音楽集会「さんびのよろこび」で男性4部合唱を歌う（指揮は日高兄）

（前ページより）

神とアブラハムの契約

第 1 ～ 8 節は、アブラハムの「召命」について語ります。ユダヤ人の父アブラハムは、神の命令を受けて財産を持たずにカルディアのウルを出て、肥沃な三日月地帯にあるハランを経由してカナンへ移されます。その間一歩の幅の土地を持つことが許されませんでした。例外的に、創世記 23 章 14 節以下にあるように、サラの墓のためヘブロンのヘト人エフロンからマクペラの土地と洞窟を買い、後にアブラハムもここに葬られます。神はまだ子供のいなかったアブラハムに「いつかこの土地を所有地として与え、死後には子孫たちに与える。また、子孫は外国に移住にて 4 百年間奴隷にされ虐げられる」。さらに神は、「彼らを奴隷にした国民は私が裁く。その後、彼らはその国から脱出しこの土地で私を礼拝する。」と告げ、「神とアブラハムとの割礼による契約」を結びます。アブラハムはこの契約に従い、イサクに割礼を施し、イサクはヤコブに。ヤコブは 12 人の族長をもうけて割礼を施します。この割礼の制度は今もユダヤ社会において続いています。ユダヤ教とキリスト教の最大の相違は、割礼無用論であり、これこそが、キリスト教の世界宗教への展開を生んだ理由です。

エジプトのヨセフ

9 節からは、ヨセフ物語になります。ヤコブの寵愛を一身に受けていたヨセフを、族長たちが嫌ってエジプトに売ります。しかし神はヨセフから離れずあらゆる苦難から救い出して、エジプト王の全体を司る大臣にします。エジプトとカナンに大飢饉が起こったとき、エジプトでは、ヨセフの先見性により食料が備蓄されていました。ヤコブとその一族は、エジプトに食料を求めましたが、ヨセフが一族に自分の身の上を話し、一族 75 名をエジプトに寄留させます。ヤコブとその一族が死んだ後に、シケムに移されアブラハムがハモルの子から買った墓に葬られたと書かれていますが、これは創世記 23 章の記述と矛盾しており、ステファノかルカの誤解です。創世記 33 章 18 節にあるようにシケムは、ヤコブが祭壇を建てるためにハモルの息子たちから買った場所です。聖書にはこのような誤解が時々ありますが、膨大な資料を読むことからこのような誤解や混乱が起こっても不思議ではありません。

モーセによる出エジプト

17 節以下は、エジプトではユダヤ人が増え過ぎ、ヨセフの功績を知らなくなった王が支配者になったとき、王はユダヤ人を欺き、虐待して乳児を捨てさせる人口抑制を行いました。この状況のなかでモーセは生まれました。神の目に適う美しい子でしたが、捨てられてファラオの王女に拾われ、王子として育てられます。エジプトの王族のあらゆる教育を受けてすばらしい話や行いをする者になったと語っています。これも誤解で、出エジプト記 4 章では、モーセは口下手で 1 度は神の申しつけを断りますが、神から雄弁な兄アロンと一緒にイスラエルの民をエジプトから引き出すことを勧められています。

さて、モーセはイスラエルの同胞がエジプト人に打たれているのを見てエジプト人を撃ち殺しました。翌日 2 人のイスラエル人が争っているので仲裁しようとしたとき、彼らは仲裁を拒否し、「だれがお前を我々の指導者、裁判官にしたのか」と言います。同胞に良か

仲裁を拒否し、「だれがお前を我々の指導者、裁判官にしたのか」と言います。同胞に良かれと思ったことを理解されなかったのです。エジプト人の殺害を知られたモーセはミデアンに逃れ、ここで祭司の娘ツィポラと結婚し二人の男の子をもうけています。４０年経って、モーセは聖なるシナイ山で、神の命令を聞きます。「私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。履物を脱げ、ここは聖なる土地である。私はエジプトにいるわたしの民の不幸を確かに見届け、また、その嘆きを聞いた」と告げ、イスラエルの民が拒絶したモーセを、燃える柴のなかからイスラエルの指導者また解放者としてエジプトへ遣わしたのです。そして、モーセは、イスラエルの民の出エジプトのためのファラオとの対決、紅海での脱出、４０年間の荒れ野での放浪生活のなかで不思議な業を行いました。神とイスラエルの民との契約で、ユダヤ人の神の導きに対する拒絶、仲保者としての預言者の言葉への不従順と反逆という構図は、モーセの時代から多くの預言者を拒絶し、最後にはイエス・キリストの十字架へと続きます。

３８節以降では、モーセが、シナイ山で受けた神の言葉を仲保者として民に告げましたが、民はモーセによる「神の命の言葉」を拒否し、かつては奴隷であっても充分に食べられたエジプトでの生活を懐かしんで、自分たちの先に立って導いてくれる神々の像を造ることを望んだのです。モーセが十戒の石版をいただくために聖なる山に登っている間にも、金の牛の像を造っていけにえを捧げ、自分たちの手で造ったものを祭って楽しみました。神はこのような民の行為に目をそむけて天の星を拝むままにさせました。預言書に「イスラエルの家よ、お前たちは荒れ野にいた４０年の間、私にいけにえと供え物を捧げたことがあったか。お前たちは拝むために造った偶像、モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を担ぎ回った。だから、私はお前たちをバビロンのかなたへ移住させる」と言われます。現代でも手近に祈りを向ける対象が欲しいもので、これが偶像崇拝を生みます。神棚、仏壇、おまじないのような目に見えるものではなく、真の神を拝まなければなりません。

幕屋と神殿

私たちの先祖には、荒れ野に証の幕屋があったが、それは、神がモーセに命じた通りに作られたもので、この幕屋はヨシュアたち先祖が受継いで、神が追い払って下さった異邦人の土地を占領するとき持ち込んだものです。これは、ダビデの時代までそこにありました。移動式のテント状の聖所であったが、この質素な聖所に飽き足らなくなり、ダビデの息子のソロモンの時代に壮麗な神殿を建てます。しかし、ステファノは、イザヤ書６６章を引用して、「天はわたしの王座、地はわたしの足台。お前たちは、私にどんな家を建ててくれると言うのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。これらすべてはわたしの手が造ったものではないか」。ここでステファノは、神殿無用論を語ります。巨大な神殿を建て、中は入れる祭司を頂点とした階級を形成して大衆を差別する、祭司の権益を守るシステムに対して批判したのです。神は人の手で造られた神殿には入らないと言います。

このステファノの説教には二つの批判があり、一つは、この神殿宗教の批判です。もう一つは仲保者たる預言者に対する民の拒絶です。預言者の一人であるモーセ以来、イスラエルの民は「神との契約」に逆らって偶像崇拝を続けてきており、神の仲保者たち預言者の言葉に耳を貸さなかったからです。ステファノは、激しくせまり、「あなたがたはいつも聖霊に逆らっています。先祖が逆らってきたようにあなた方もそうしています。いったい

（次ページへ）

（前ページより）

あなた方の先祖が迫害しなかった預言者は一人でもいたでしょうか。彼らは正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたは最後で最大の預言者であるその方を裏切る者、殺す者となった。』とイエス・キリストの殺害を非難したのです。

人々は、このステファノの歴史を通してのユダヤ人による神への裏切りの追求に憤って歯軋りをします。ステファノが「天が開いて人の子が神の右に立っておられるとのが見える」と言うと、大声を上げて叫びながら耳を手でふさぎ、石を投げつけます。その間、ステファノは、主を呼び求めて「主よ、わたしの霊をお受け下さい」。また、「主よ、この罪を彼等に負わせないで下さい」と大声で叫んで息を引きとります。このステファノの殉教の様子は、キリストの十字架上の殉教と良く似ています。現代に生きる私たちも、目に見えるシステマティックな様式の魅力に目を惑わすことなく、個々人が神の生ける宮であることを自覚して、預言者を大切にし、その究極であるキリストを仰ぐ者となりたいものです。

８章からは、キリスト教徒への憎しみが増して、エルサレムで大迫害が始まり、多くのキリスト教徒の投獄、殺害、追放が始まります。その中心人物として、サウロ、若き日のパウロが担います。しかし、追放されたキリスト教徒は、逃亡した先々でキリストの福音を語ります。キリスト教の大迫害が、キリスト教の世界への拡散になるという、はかり知れない神の御業の成就につながって行きます。このきっかけになったステファノの逮捕、改革を促す批判的な説教と殉教を私たちは覚えたいものです。

（例会司会：杉野　書記：玉澤　写真：小笠原・松田　会報レイアウト：小野）

＊使徒言行録＊ちょっと復習＊

信友会ではこれまで使徒言行録の７章までを学びました。今後も毎回１章ずつを基本として学んで行きますが、ローマでのパウロの宣教を伝える第 28 章を終えるのには後４年程の時間が必要になります。会報では今後、毎回の例会での講演記録とは別に別の角度からもこの使徒言行録を題材にしてコラムとしても取組みたいと思います。第１回はこれまでの復習を兼ねて、「使徒言行録Ｑ＆Ａ」を作りました。

Q：使徒言行録ってなに？

A：新約聖書の中の１書で、伝統的に４つの福音書の後におかれます。

Q：使徒言行録の内容は？

A：一口で言えばキリスト教の最初期の様子であり、初期キリスト教の発展を記す貴重な文献です。

Q：使徒言行録と使徒行伝は同じもの？

A：同じです。「使徒行伝」はプロテスタントの文語訳聖書の訳です。プロテスタントの新改訳聖書では「使徒の働き」と訳され、現代訳聖書では「初代教会の働き」となっています。「使徒言行録」というのはカトリックとプロテスタント諸教派が協力して翻訳した新共同訳聖書での表記です。

Q：これまでに学んだ 1~7 章の内容は？

A：大きく、キリスト教宣教の準備（1:1~2:13）とエルサレムにおける宣教（2:14~ 継続中）です。

- イエスの昇天とマティアの選出（１章）：４月例会
- 聖霊降臨（2:1~13）とペトロの説教（2:14~47）：５月例会
- ペトロとヨハネの活躍（３章、４章）：５月例会（3:1~5)、６月例会（3,4 章）、７月例会（４章）
- アナニアとサフィラ（5:~11）と使徒たちの活動と迫害（５：12～42）：８月例会
- ステファノら７人の選出（6:1~7）とステファノの殉教（6:8～継続中（8:3 まで）：
  11 月例会（６章）、２月例会（７章）

＊内容については会報をご覧下さい。　（参考：ウィキペディア）